

『オハイオ州ワインズバーグ』を読む(4) ——「哲学者」について——

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

新堀 孝

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1949) の『オハイオ州ワインズバーグ』 (*Winesburg, Ohio*, 1919) の語り手がいう、各章の中心人物にとっての「真実」 ('truth')¹ が何なのかを考察するこの論考も第4回目となる。今回は「哲学者」 ("The Philosopher") のパーシヴァル (Parcival) にとっての「真実」について考える。ただし、今回の「真実」は中心人物のパーシヴァル自身が「この世の人間は皆キリスト。皆、磔にされる」 (27) と言っているから、これが彼にとっての「真実」ということになる。だが、彼のこの言葉の真意ははっきりしない。この言葉を、パーシヴァルが超人思想を説いたと解釈する研究者もいるが²、彼が説く思想は超人思想とはいえないであろう。彼の「この世の人間は皆キリスト」という前の「今ではなくても、いつか……結局は、俺は磔にされるんだ、無意味に ('uselessly') 磔にされるんだ」 (33) (上点は筆者による) という言葉から、パーシヴァルは人間がキリストのように崇高になれると言っているのではなく、キリストは人間と同じように無意味だったと言っていることがわかるからである。パーシヴァルには強い『人間不信』という思想があり、このような思想を後世に伝えたいという『激しい思い込み』があるのではなかろうか³ という岩崎の指摘は正しいと思うが、物語のなかの情報だけに基づいて彼のこの激しい思い込みを説明しようとする、パーシヴァルは少なくとも強迫性障害であるか、もっと言えば統合失調症ではないかとさえ思えてしまい、それがすべてを説明するマジックワードのようになってしまうように思われる。この論考においては、このマジックワードに頼ることなく、物語の時代背景なども取り入れて、彼の人間不信というか、虚無というか、人間不信とも呼ぶべき思い込みを説明することを試み、そのうえでパーシヴァルにとっての「真実」とは何かを考察したい。

1. 作品冒頭の人物描写からわかるパーシヴァルの人となり

パーシヴァルは「垂れ下がったへの字の口」 ('a drooping mouth') (22) をして、そ

の口が「黄色い口ひげに覆われている」(22)という。口は「弁舌力」⁴の象徴というから彼がある程度、彼の話の聞き手となるジョージ・ウィラード (George Willard) にとっては説得力のあることをよくしゃべることを暗示しているのだろう。口が「への字」をしていることは、パーシヴァルが真面目で、神経質、ユーモアに欠ける人間らしいという印象を読者に与える。(このような性格が、彼の人間不信の下地になっているとも考えられる。) 口ひげが黄色くなっている ('yellow') のは、彼が葉巻を吸うからでもあるが、同時に彼が自分の身をきれいにすることにあまり関心がないことを暗示している。また、黄色は「臆病、精神の頹廢」⁵、「不義、背信」⁶といった良くない事柄を連想させる色であるから、彼の口ひげの色は彼の内面にそういう一面があることの暗示でもあるのだろう。彼がいつも着ていた「白いヴェスト」 ('white waistcoat') (22) が「汚れている」 ('dirty') (22) のは、彼が世間ずれしていて今では必ずしも清らかな精神の持ち主ではないことの暗示であろう (これも、彼が自分の身をきれいにすることにあまり関心がないことの暗示でもあろう)。そのヴェストのポケットから、いつも安葉巻をはみ出させているのは、安葉巻ではあってもパーシヴァルなりに格好をつけているのだろう。身をきれいにするには関心がなくても、自分が権威のある人間であるように見せることには関心があるようだ。

語り手は彼の歯についても言及しているが、歯は「知恵」⁷の象徴であるから、彼の歯が「黒い」 ('black') のは、彼の知恵が普通ではないことを、また「不揃い」 ('irregular') (22) なのは、彼の知恵 (ここでは思想、哲学といってもよいだろう) が理路整然として説明のつく、首尾一貫した、きちんと体系化されたものではないことの暗示だろうか。実際、彼がジョージに身につけることが賢明だと説いた「処世術 (振る舞い方)」 ('a line of conduct') (23) は「彼自身、説明できないものであった」 (23) というのだから。

この歯に関する描写は、次の目についての描写とも関係していると思われる (実際に、歯と目の描写は一文で書かれている)。

彼の歯は黒くて不揃いで、彼の目には何か奇妙なものがあつた。左目の瞼がピクピク動いて、パタッと閉じるとパッと開いた。それはまさに、瞼が日よけのようで、医者の頭のなかに誰かがいて、そのひもで遊んでいるかのようであつた。(22)

目は「性格や気持ちの現れるところ」⁸とされる。そこに「奇妙なもの」が見て取れるのは、パーシヴァルの性格や思考に奇妙なものがあることを表している。しかも、その片目が「頭のなかに誰かがいて、ひもで遊んでいるかのよう」に「パタッと閉じたり、パッと開いたりした」ことに、彼の人格の二重性を読み取ることができ、それが「左」 ('left') ——左は「弱さ、無意識、過去、退化、敵意」⁹の象徴といわれる——であることが、彼の意思とは関係なく彼のそういう側面や意識が彼の思考に影響を及ぼしていることを暗示しているといえ

よう。つまり、彼の心は過去に負った心の傷のようなもの(トラウマ)にしばしば影響を受け、人間や世界、宗教(神)に対して好ましくない思いを抱くことがあるということだ。パーシヴァルの心のなかには分裂した思考、価値観が同時に存在していたということである。

2. パーシヴァルが自信のない哲学者であることの暗示

パーシヴァルはジョージを好いていて、二人の「知り合い関係は医師[パーシヴァル]から近づいて始まったものであった」(22)。パーシヴァルはジョージと話したくて仕方がないという印象を受ける。パーシヴァルが自分の思いを伝えてくれる伝達者として物書きの一種である新聞記者ジョージ・ウィラードを選んだことは、それはそれで正しいし、また、自分がかつて新聞記者として働いていたことがあるという経験からも納得できるが、新聞記者ならばウィル・ヘンダソン(Will Henderson)であってもよかったはずである。しかし、パーシヴァルは中年のウィルではなく未成年であるジョージを選んだ。ここには、パーシヴァルの自分に対する自信のなさ、大人と呼ばれる年齢に達している人間との関わりを避けようとする姿勢が見て取れる。この選択と姿勢の背後には、パーシヴァルが自分の話の聞き手に対して優位な立場を保ちたいという気持ちがある。聞き手が精神的に未熟な青年であれば、自分の考えを素直に聞き入れてくれる可能性は聞き手が大人である場合よりも高く、逆に言えば反論を受けたり嘲笑されたりする可能性が低いことが、パーシヴァルにはわかっていたのだろう。パーシヴァルがジョージに対して優位な立場を保ちたいと考えていたという解釈がおそらく妥当であることは、「青年[ジョージ]には、その話はとても現実味があつて、意味に満ちていた。青年はその太った不潔そうに見える男を尊敬し始めていたし、ウィル・ヘンダソンがいなくなってしまう午後になると強い関心を抱いて医師がやってくるのを楽しみにした」(23)(上点は筆者による)こと、おそらく、そのジョージの尊敬の念を味わうために、ウィル・ヘンダソンが新聞社の編集室から出て行くと「すぐにパーシヴァルが姿を現した」(22)ことからわかる。パーシヴァルが聞き手であるジョージから尊敬されて自分の自信のなさを忘れようとしていることも、パーシヴァルが編集室の「正面入口から入ってきて椅子に腰掛けると、安葉巻の一本に火をつけて、足を組んで話し始めた」(22-23)(上点は筆者による)という描写からもわかる。哲学者としてのパーシヴァルはジョージの前では堂々たる人間を演じるのである。「俺は君に俺に対する敬服の念を抱いてほしいと思っている、それは事実だ」(23)という彼の言葉は、おそらく本音である。

ところで、語り手はパーシヴァルを紹介してすぐに、ウィル・ヘンダソンが酒場に通って酒場の店主トム・ウィリー(Tom Willy)と猥談を楽しんだり、うわさ話をしたりする習慣があることを説明する。ウィルは45歳で「好色家」(‘sensualists’)の一人であり、ウィルと話をするトムもウィルとの話に興じているうちに「手をこすり合わせた。興奮するにつれて、彼の指の赤さは深まった。それはまるで彼の手を血に浸して、その血が乾いて色あせた

かのようにであった」(22)という。語り手は、この描写にどのような意味を込めたのであろうか。ひとついえることは、酒場で女の話やうわさ話をするウィルと、新聞社の編集室で怪しげな医者 of 真偽のはっきりしない人間や世界についての話に聴き入るジョージの対比、つまり、ジョージの未熟さ——それは直接的にはジョージの性的な未熟さであるが、そこから発展してジョージの精神的な未熟さをも含む——を読者に印象づけることを語り手は狙っているということである。裏返していえば、それは、未熟な青年を相手にしか自分の人間観や世界観を説くことができないパーシヴァルの未熟さをも暗示することになる。

3. 存在意義を確認したいが人間嫌いの哲学者

パーシヴァルは、シカゴ (Chicago) から5年前にワインズバーグに来たのだという(23)。彼の後の言葉が事実だとすると、彼はオハイオ州 (Ohio) のデイトン (Dayton) という町で幼少期から青年期を過ごしたらしい(24)。彼は母の願いを叶えるために「長老派教会の牧師」(‘a Presbyterian minister’) (24) になるための勉強をしていたのだという。オハイオ州デイトンからシカゴへ行ったのは牧師としての勉強を終えて都市で牧師としての仕事を得るためだろうか。シカゴのあるイリノイ州 (Illinois) はオハイオ州より西に位置するから、彼がオハイオ州を出たのは新しい生活を始めるためであったのだろう。だが結果として、シカゴからオハイオ州ワインズバーグに戻ってきた、つまり東へ移住してきたわけだから、彼がワインズバーグに来たのは何らかの失敗や挫折の結果であったのだろうと推測しても、それはおそらく間違いではないだろう。それを裏付けるかのように、ワインズバーグに着いたとき、彼は酔っぱらっていて自分の手荷物の扱いをめぐる喧嘩をして留置場に入れられる始末であった。次の生活を始める町に着いたときに喧嘩をするほど酔っぱらっているというのは普通では考えられない。この事実だけを考えれば、パーシヴァルはごろうつきと同じであって、牧師になる勉強をしていた人間とは思えない。それだけ大きな失敗か挫折をして、彼はワインズバーグに戻ってきたと考えるのが妥当であろう。

留置場から釈放されると、パーシヴァルは「靴の修理屋」(‘a shoe-repairing shop’) (23) の上の一室を借りて医師として診療所を開業した(23)。靴は「権威」¹⁰の象徴だから、彼が失ってしまった、もしくは失いかけた自分の権威や自信を取り戻したいという気持ちがあることの暗示であろう。ただ、診療所を開業した場所が「目抜き通りの中心街から離れた所」(23)であったことから、彼の人間嫌いの側面が窺われる。一方では自分の権威を取り戻したいと思いつつも、他の人間との接触を避けようとする相矛盾した思いが彼の心にはあるようだ。パーシヴァルは、中心街から見ると線路の向こうにある小さな木造の建物のなかにあるビフ・カーター (Biff Carter) の不潔な昼食屋で食事をしたが、そこへ行くと「大手を振って歩き」(‘stalked’) (23)、自分を「名士」(‘a man of distinction’) (23) と呼んだ。診療所に来る患者もほとんどいなくて、来ても「治療費を払うことのできないような貧

しい者たち」(23)であった。自分の権威は取り戻したいが人間と関わるのは嫌だ、そのような心持ちでいたことが、ワインズバーグでの彼の暮らしからわかる。

パーシヴァルが人間と関わるのを嫌がったのは、おそらく、他の人間、特に大人と関わりをもつと、自分と相手との間に上下関係が生じるためであろう。もっというなら、パーシヴァルは、自分と他者との関係において自分が相手より下の地位に甘んじることを嫌っていたらしいことがわかる。めったにやってくる患者も治療費が払えないような貧しい者たち、貧しくなくても患者と医者という治療行為を施し、そして受けるという観点から見れば、パーシヴァルはいつも患者より上の立場にいたことができた。彼が通う昼食屋は、「夏になるとハエがいっぱい、店の主人のエプロンが床よりも汚くなる」(23)のような、不潔で客があまり来ないような店であって、そこではパーシヴァルは店の主人と客という、やはり上の立場にある。そのような生活をしていたとき、パーシヴァルはジョージ・ウィラードという格好の話し相手を見つけたのだ。ジョージは未成年で「人間を見て考えたい」(21)という欲求をもっていたから、パーシヴァルの話に関心をもつものもったことだったといえよう。

パーシヴァルの話は、どこまでが本当でどこからが作り話なのかがわからないものだった。「君はおかしいと思ったことはないかね、俺は何もしていないのに暮らしに必要な金もっているなんて。俺はここへ来る前に大金を盗んだのかもしれないし、殺人事件に関係していたかもしれないぞ」(23)と犯罪と関わりがあったかのような話をする。シカゴでおこったクローニン(Cronin)という医師が殺された事件をもち出して、犯人の体験をいかにも自分がそこにいたかのように事細かに話す。これは、まず間違いなく作り話であろうが、パーシヴァルがジョージにこのような話をするのは、新聞記者をしているジョージの好奇心を駆り立てようというねらいがあるのだろう。そこまでしてでも、パーシヴァルはジョージの関心をつなぎ止めておきたかったということだろう。

4. パーシヴァルの自信のなさや劣等感の要因

話が少年期または青年期の事柄に至ると、パーシヴァルが自分に対して否定的というか自信がない人間になる要素が、その頃の経験にもあったことがわかる。彼の母は貧しく、洗濯の内職をしていた(24)。兄は鉄道会社のペンキ塗りをしていたが、稼ぎを「母に渡すことは一切なかった」(24)し、それだけではなく自分が稼いだ金を「台所のテーブルに山積みにして」(24)、その金に「手を触れるな」(24)と言いつつ、母は「そのテーブルのわきに立って、石鹸の泡でいっぱいのエプロンで目を拭いていたものだった」(24)。兄は母にもパーシヴァルにも「優しい言葉ひとつかけたことはなく、積んである金に俺たちが手をつけようものならいつもわめき散らしていた」(25)にもかかわらず、母は「俺よりも兄をずっと愛していたんだ」(25)とパーシヴァルはいう。しかし、ここで疑問なのが、彼の母は本当に彼よりも彼の兄を愛していたのかということだ。彼の母が本当に彼よりも彼の兄を

愛していたのかどうかは読者にはわからない。パーシヴァルが、母は自分より兄を愛していたと思込んでいたことは事実ではあるが。この思い込みがパーシヴァルの心に劣等感を生じさせ、その劣等感はその自分自身の存在意義に対する懷疑や自信のなさを生み出すものになったのだろう。

では、パーシヴァルは何故母が自分よりも兄を愛していると思うようになったのか。それは、兄のおかげで「それなりによい暮らしができていた」(25)からであろう。父は「精神異常で(‘insane’)……施設に入っていた」(24)から一家の支えになるどころではなかったし、母も洗濯の内職でしか収入を得てはいなかった。そのような家庭環境にあっても自分は牧師になるための勉強ができた。それは兄が表向きは稼ぎを母に渡してはいなかったが、実際には兄の稼ぎで潤っていた部分があったからであろう。パーシヴァルが「積んである金に俺たち(‘we’)が手をつけようものなら」(25)とっている「俺たち」には、彼の母も含まれていると考えるのが妥当であろう。兄も兄で、「わめき散らしていた」(25)けれど暴力を振るって二度と金に手をつけるなど迫ることもしなかったようだ。だから、パーシヴァルは「夕方、夕食の後に金の積み上げてあるテーブルのわきに跪いて何時間も祈った」(25)ののだろう。パーシヴァルにとってさらに良くなかったのは、兄が「食料雑貨」や時には「母の服や自分の靴」(24)を送ってきたことだった。パーシヴァルから見れば兄の方が母の役に立っているように見え、それが兄に対する引け目とか劣等感になったのだろう。その引け目や劣等感をはねのけるために、そして母の愛を自分にも向けようと、パーシヴァルは母の望みである牧師になるために「勉強していた」(24)し、新聞記者として働いて「一週間に6ドルを稼いで、それを真っ直ぐ家に持ち帰って母に渡した」(25)(上点は筆者による)。しかし、母が自分より兄を愛しているという認識を変えるような母の言動の変化は認められなかった。その不満を晴らすために、パーシヴァル少年は、兄の金から「1ドルか2ドル盗んで、ポケットに入れ……飴玉や煙草やそのような類のくだらないものを買って自分のために使った」(25)。その行為は、当時は「とんでもない」(‘terrible’) (25) ことだと思われ、「いつも心にひっかかっていた」(25)と、パーシヴァル本人が回想としていっているが、それにはふたつの意味があるのではないか。ひとつは、金を盗んだことが罪であるということ。牧師になろうとする人間が金を盗むとは、自分でも情けないと自分を責める気持ちはあったであろう。もうひとつは、金を盗んだ結果は本文には書かれていないが、兄がまたわめき散らしたことは容易に想像がつき、金に手をつけた覚えのない母にはパーシヴァルがやったこととすぐにわかるから、母の気持ちがよけいに自分から離れていくように思われたであろうということだ。金を盗むことが自分に不利益になることがわかっていながら、心が満たされないパーシヴァルは盗むことをやめられなかったのだろう。パーシヴァルの兄に対する引け目と劣等感はその兄の事故死で絶対に覆すことのできないものとなってしまった。しかも、母と自分の生活を潤していた兄が働いていた鉄道会社の車両にひかれて亡くなるとは。

このような事柄を経て、パーシヴァルは人間が生きる意味や人間の行いの意味に懐疑心を抱くようになったのだろう。

加えて、パーシヴァル少年は、人間が自分の罪や過ちをごまかそうとする醜さを目の当たりにする。(その醜さは、兄の金を盗み取っていた自分のなかにもあったものだが。)彼の父が亡くなったときに、施設の職員に「職務怠慢や不注意」(‘negligence and carelessness’) (25)があったのだ。彼らはパーシヴァルが新聞記者であることを知ると、その怠慢と不注意を新聞記事にされるのではないかと恐れ、彼には「そのような意図は全くなかった」(25)のに、「彼が王様であるかのように対応して」(25)、ことのもみ消しを暗に求めてきた。このことは当時のパーシヴァルには大きな意味をもたなかったようだ。彼は父のために熱心に祈ったのだから。

だが、このようにして生まれたパーシヴァルの劣等感と人間に対する不信感は、シカゴ住まいの間に増幅されたようである。その背景を時代の状況から推測してみたい。

5. パーシヴァルを懐疑主義者、人間嫌い、人間恐怖症にした要素

文学作品を解釈するとき本文に書かれていない情報をもち込むことには些か抵抗を感じるが、この物語の場合は語り手が読者に与えてくれる情報が少なすぎて説明がつかないため仕方がない。物語には書かれていないパーシヴァルのシカゴ住まいの間に彼の思考に影響を及ぼしたと思われる、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会の情勢を簡単にまとめてみたい。ここでは、パーシヴァルはオハイオ州デイトンで牧師になる勉強を終えて牧師として仕事をするためにシカゴへ行ったと仮定しよう。

アメリカの文化の中心はボストン (Boston) からニューヨーク (New York) に移った。ニューヨークやシカゴでは産業化が進み、工場の賃金労働者の数が増えた。都市部の人口が増加するにつれて、都市労働者の労働環境は悪化して行き、労働者は低賃金と過重労働に苦しむことになった。企業は低賃金で製品を作り高価格でその製品を売って巨大な利益を得、一層の資本増加をはかり、それが「金がすべて」という社会風潮を生み、社会倫理の低下、政治腐敗をもたらした。労働者は劣悪な労働条件で働かされ、1888年には3万人、1908年には70万人が労働災害で死亡したとされる。政府による革新政策にもかかわらず、定期的に恐慌が襲ってきて(1873年、1893年、1907年、1919年)、資本家によって労働者の首切り、賃下げが行われた。これに対して労働者も労働運動を繰り広げ、労働組合を組織するなどして資本家に対抗した。

資本主義の発達を支えた要素として、①個人主義、②プラグマティズム(観念や思惟の真否は利益を生むかどうかによって決まるという考え方)、③ダーウィニズムとソーシャル・ダーウィニズム(社会進化論: 適者生存の自由放任主義の立場をとり、利潤追求と富の獲得

は人類の進歩に貢献するとの解釈から保守的な資本主義のよりどころとなった)、④体制順応的なプロテスタンティズムの出現(勤労の結果としての蓄財は神の恩寵の表れであるから競争も金儲けも神の意志に叶っているとして資本家たちの信仰を集めた)などが挙げられる。また、その一方で、資本家と労働者の間に中産階級が生まれ、交通機関の発達に伴い、諸悪の根元、精神的腐敗を意味するようになった都市部から、彼ら中産階級は郊外へ退出を始め、郊外の住宅に住む核家族が近代家庭の理想像となっていった。また、解放された黒人たちは選挙権を与えられたが、人種差別は激化し、KKK団のリンチの恐怖にさらされるなど、解放前よりも一層不安定な状況に置かれていた。(以上、『新版アメリカ文学史』¹¹の内容を筆者が要約。)

従来から存在するプロテスタント教会、特に長老派教会の教会所属分布をみると、独立革命時には約20%だったのが、19世紀半ばには約12%に低減している。19世紀末頃には「ファンダメンタリズム」と呼ばれるようになった保守的キリスト教勢力は、長老派でも「教理の5要点」(聖書の無謬、イエスの処女降誕、代理的贖罪、肉体的復活、奇跡の力)を再確認する1910年の総会決議を生んだ。しかし、従来から存在するプロテスタント教会は長老派に限らず教勢不振がみられ、後に「毎日どこかで新しいカトリック教会が建ち、どこかでメソジストや長老派の教会がガレージになっている」という自嘲が聞かれるほどになったという。

また社会の不寛容も拡大した。正義を犯していなくても不快な感情を暴力的な手段で発散することもあった。アメリカでは、その時その時の正義に反する人間をヒステリックな方法で罰してきた歴史がある。アメリカ史初期の魔女狩りからしてそうだ。『オハイオ州ワインズバーグ』の物語が展開される頃だと、1873年のコムストック法の成立により性的な描写を含む芸術や文学を猥褻なものとして取り締まり、多くの人間が罰せられた。また、第一次世界大戦時には反戦を唱えた伝統的平和主義教派の教徒たちは非愛国的であると強く非難され、キリスト教界内でもキリスト教信仰と愛国心を同一視し、兵役拒否を非キリスト教的であると断じる者もあったという。さらに、この戦争期(第一次世界大戦)の愛国心興隆を背景に、前世紀末にひとたび制圧されたクー・クラックス・クランが息を吹き返した。同組織は、大量の移民流入や黒人の北部への浸透に脅威を感じ、ユダヤ人やカトリック教徒の社会的な地位向上を妬む都市の白人層を巻き込んで、全米に広がったという。(以上、『アメリカ・キリスト教史』¹²の内容を筆者が要約、補筆。)

20世紀に入ってから北部の工業が吸収したヨーロッパ移民は、南部イタリア系が最後で、その後吸収したのが、……国内移民である黒人だったのである。

工業都市に移り住んだ黒人たちはやがてゲットーを作り、このゲットーに後から後から貧しい黒人たちが流れ込んでくるようになる。

それまで北部の都市では黒人問題は起きていなかった。黒人ゲッターは存在せず、貧しい白人と黒人は、同じ場所に住んでいた。とくに、シカゴなどでは貧しい白人が多かったので、1910年頃までは、白人と黒人の共存が続いていた。

だが南部から黒人がどっと流入してくると、白人と黒人の対立が激しくなった。ボストン、ニューヨーク、シカゴ、デトロイトなどで、南部の黒人が安い労働力として入り込むと。白人たちは反発を強め、北部の都市にもKKKができた。

メリーランド州のボルチモア市をはじめ各都市で、白人たちは自分たちの地位を守るために差別法を敷き、住宅や職業から黒人を締め出しにかかった。北部が黒人問題を抱えもむようになったのはこの頃からである。(『アメリカ内乱白人の理論』¹³ から抜粋。)

思い返してみれば、『オハイオ州ワインズバーグ』のなかでも、「手」(“Hands”)のアドルフ・マイヤーズ(Adolph Myers)も男のあるべき道を踏み外していると誤解されて、町の人々からリンチを受けて町を去らざるを得なくなったし、「母」(“Mother”)のトム・ウィラードも保守的なワインズバーグの町で民主党員だったために銃をもって追いかけられたし、それが「正々堂々と」もしくは「合法に」(‘fairly’)行われていたという話があった。

以上のような事柄を考慮すると、パーシヴァルがシカゴで牧師として、その職責を果たすことができなかったこと、それが劣等感をもち自分の存在意義に自信のないパーシヴァルには自分がいかに非力であるかを痛感させる結果となったこと、資本家、労働者双方の人間の醜さに幻滅して、また、労働争議や黒人差別などのヒステリックな社会現象にも幻滅して、人間の理性や向上心に対して絶望したことなどが想像できる。また、人間は支配される側に入っただけとはいけないということも知ったであろう。支配される側の人間は支配する側の人間の判断で運命が変わってしまう。それに、人間はいつ支配される側に立たされるかわからないということも学んだであろう。コムストック法に基づく取り締まりがそうだ。判断の基準は「主の巡査部長」(Roundsmen of the Lord)を自任したコムストック(Anthony Comstock, 1844-1915)の主観だった。彼の目に猥褻とうつれば、芸術、文学、医学に関わらず性的描写を含むものを書いたものは罰せられた¹⁴。それが、人間や信仰に絶望したパーシヴァルにとっては、パリサイ人たちの正義に背いた罪でイエスが磔にされたことと同じ意味をもったのだろう。処罰はいつどのように下されるかわからないという恐怖に彼は取り憑かれることになったのだろう。この考え方は、パーシヴァルを一層他の人間から遠ざけることになった。処罰を受けずに済むように、他の人間とは常に距離をとる、そして、自分の言動には慎重に注意を払わねばならぬという、一種の悟りのようなものを、パーシヴァルは得ていたのだと考えられる。

6. 人間に絶望した哲学者の説教

パーシヴァルは、子供の頃から自分は母に愛してもらえない子として自分の存在意義に疑問を抱き、青年期には自分の非力さを感じていた。シカゴという大都会へ行ったものの牧師として大きな挫折を味わい、オハイオ州に戻ってきた。これ以上絶望し、敗北しないための生き方として、彼は他の人間に期待せず、見下して、可能な限り関係をもたずに生きる知恵を身につけるようになっていた。だが、人間に絶望して生き続けることは辛い。だから、パーシヴァルは自分のその辛さをジョージが経験しなくて済むように、ジョージに忠告したいのだ。

「……君はもう一人の愚か者になって終わるかもしれない。俺は君に警告したいし、警告し続けたいんだ。……」

パーシヴァル医師はジョージ・ウィラードの人間に対する姿勢について話し始めた。青年には、この男が人間は皆いやしむべきものに見えるようにするというたったひとつのことしか目論んではいないように思えた。「俺は、君がよりすぐれた存在になれるように、君を嫌悪と軽蔑で満たしてやりたいんだ」と、彼は断言した。「俺の兄貴を見てみろよ。たいした男がいたもんだ、なあ。兄貴は皆を軽蔑していたぜ。兄貴が、どんな軽蔑を込めて母と俺を見ていたか君にはわかるまい。兄貴は俺たちより優れた人間だったんじゃないか。優れていたさ、君にもわかるだろう。君は兄貴に会ったことはないが、それを感じさせてやっただろう。君に伝えただろう。兄貴は死んだ。昔、酔っぱらって線路に横になっていたら、仲間のペンキ塗りたちと一緒に住んでいた貨車にひかれたんだ。」(25-26) (上点は筆者による)

「もう一人の愚か者」とは、パーシヴァルが自分を念頭にしていることはいままでのない。自分が母に気に入られようと努力しても兄にはかなわず、母の愛を自分に向けようとしても叶わなかったこと、牧師になって人を導こうとしても成功しなかったことが下地となって、そこから生じる苦しみを逃れるためには、自信家であった兄のようにすべての人間を見下すことしかない。パーシヴァルの説教の目的が、すべての人間を「いやしむべきものに見えるようにする」(25) ことを唯一の目的としているようにジョージには思われたのは、実際にそういう目的で説教が行われていたからだ。パーシヴァルの説教が兄の話に及ぶと、説教の意味合いは多少変わる。パーシヴァルが言いたかったのは、あのすごい兄貴でさえ、他のペンキ塗りの仲間たちと暮らしていた貨車にひかれて死んだ。他の雑魚どもにどれだけの存在意義があるというのか。人間、いつ、どのような災難がふりかかって死ぬかわからない。人間の存在意義などその程度のものだという、人間の存在価値にすら懐疑的な彼の思いを暗示しているのである。

ここまでで、パーシヴァルにとっての「真実」は見えたといってよかろう。彼は少年、青年時代から、自分は兄よりも劣っているという意識をもっており、その兄が母に愛され、自分よりも「優れた」(‘superior’) (26) 存在であったにもかかわらず、勤務していた鉄道会社の、自分たちが住んでいた貨車にひかれて死んだことで、自分に限らず人間の存在や行いについて懐疑的になりかけていた。それを煽る結果をもたらしたのが、おそらく、シカゴという大都市で彼が目当たりにした人間の醜悪さ、粗暴さ、残虐さ¹⁵だ。それらが、彼の人間の存在や行いに対する懐疑を深めさせた。さらに、荒廃した大都市で牧師としての職責を果たすことができなかつたことで、信仰に対しても懐疑的になった。絶望した彼はワインズバーグに移り住んできたが、その時の彼には次のようなことが「真実」となっていたであろう。①他の人間に期待をすべきではない、期待をすれば裏切られる、②人間を軽蔑することは、裏切られて絶望する辛さを経験しないためのひとつの方法である、③他の人間からの処罰は理不尽に下される、④その処罰を受けないようにするためには他の人間との関係を希薄なものに保ち、自分の言動には慎重でなければならない。

ではなぜ、そのように慎重に生きてきたパーシヴァルは、事故に巻き込まれて命を落とした女の子のために町の人間が助けを求めたときに、それを拒むようなことをしてしまったのか。その理由として推測されることは二つある。ひとつは、彼が「執筆中だった本」(26)——その本は、パーシヴァルがジョージに説いていた、周囲の人間を「いやしむべきものに見えるようにする」(25) ために見下すことを薦める言葉に満ちていたことは容易に想像できる——にのめり込みすぎて、注意が疎かになった、つまり、ちょっとした気の緩みが生じたのであろう。より具体的にいうと、彼は自分で本に書いている言葉に影響されて気が大きくなり、結果として、本当に兄のように振る舞ってしまったということである。もうひとつは、まだ来ていないジョージを心待ちにしている、既に死んでしまっている子のために出かけるわけにはいかないという苛立ちを感じたということ。どちらが本当の理由かを断言することはできないが、彼の左目によって暗示される彼の人格の二重性を考慮すると、前者である可能性の方が高いように思われる。パーシヴァルは兄のような生き方に憧れ、ジョージにそのような生き方を説いていながら、自分はその生き方を実践することができなかつたと考える方が「哲学者」というこの章の題とも合うように思われる。彼が説く哲学はあくまでも言葉のレベルにとどまっていた実践を伴わないもので机上の空論にすぎないと思える方が、一般に理論先行と言われる哲学のあり方と一致するように思われるからである。いずれにせよ、普段の彼ならば発することのない言葉を、彼は不注意にも口にしてしまったのである。そして、彼には自分の言葉によって引き起こされるであろう、つまり、自分の知識から自分の身に起こるであろう事態が想像できた。

彼 [パーシヴァル] は興奮して断言した、「俺のしてしまったことが、この町の連中

を怒らせる。俺が人間の本性を知らないとでもいうのか。何が起こるか、知らないとでもいうのか。俺が断った話が噂となって広まる。やがて、男たちが集団になって、そのことについて話をする。連中はここに来る。口論になって、絞め殺してやるという話になる。そして、連中は再びここへロープを手にしてやって来るんだ。」

パーシヴァル医師は恐怖に震えた。「俺には予感があるんだ」と、彼は語気を強めて断言した。「俺が話していることは、今朝は起こらないかもしれない。今夜まで先延ばしにされるかもしれないが、俺は絞め殺される。俺は目抜き通りの街灯の柱に吊されるんだ。」(26)

パーシヴァルが想像している事態は、パーシヴァル本人にとっては確実に起こると思われる事実である。「興奮して断言した」り、自分には「人間の本性」(‘human nature’) がわかっているといたり、「予感がある」と語気を強めていたりしていることから、その確信の強さがわかる。

それでも、パーシヴァルの極限まで高まった「恐怖」(‘fright’) (26) は、「通りにつながっている階段を恐る恐る見下ろすと、……不安(‘doubt’)にかわり始めていた」(26)。これは町の間人が詰めかけてくる気配が感じられないことにわずかな安堵を感じたからであろう。でも、恐怖は完全に払拭されたわけではない。「つま先立ちで部屋を横切って」(26)、ジョージに近づいて、パーシヴァルはジョージに小聲で、「今ではないにしても、そのうち、俺は磔にされる、無意味に磔にされるんだ」(26) というと、首を横に振った。パーシヴァルがつま先立ちで歩いたり、小聲で話したりしているのは、自分の気配を消そうとするため、首を横に振ったのは「失望」¹⁶の現れであろう。パーシヴァルは、自分には執筆中の本を書き終えることができないかもしれないという。そして、その場合、「君には、その本を書くことができるだろう」(“… you will be able to write the book …”) (27) といって、ジョージに本を完成させることを懇願する。そして、自分の哲学のエッセンスをジョージに伝える、「その思想はとても簡単明瞭だ、君が注意を怠らなければ忘れることはない。つまり、こういうことだ。この世の人間は皆キリストであり、皆磔にされるということだ」(27)。

ここまでくると、ジョージがパーシヴァルの話をどの程度信憑性のあるものと受け止めていたのかはわからない。語り手は、ジョージの反応に一切言及していない。だが、語り手は、読者にパーシヴァルの哲学のエッセンスにわずかばかりの疑念を抱かせるように仕向けている。パーシヴァルが自分の哲学のエッセンスを語るに至ったきっかけを、次のように設定しているからだ。

彼 [パーシヴァル] の拒絶の無益な無慈悲さは気に留められなかった。実際、彼を呼びに階段を駆け上がってきた男は、医師の拒絶を耳にすることなく立ち去っていたの

であった。

パーシヴァル医師は、この経緯を全く認識していなかった。(26)

パーシヴァルが自分の哲学のエッセンスを語るに至った状況は、彼の誤解に基づくものだった。そのことが暗示するように、彼の哲学のエッセンスそのものも、人間の様々な側面のうちのいくつかだけを拡大解釈して作り上げられたものだからである。だからといって、語り手はパーシヴァルを非難しているわけではない。なぜなら、語り手の目的は、パーシヴァルという歪な人間がいたということを読者に伝えることを目的としているからである。

註

この論考は、『大学院紀要』第46集(東洋大学大学院、2009、285-299)に掲載された「『オハイオ州ワインズバーグ』を読む(3)」の続稿である。

1. *Winesburg, Ohio*. (eds. by Charles E. Modlin and Ray Lewis White. W. W. Norton & Company. 1996. First Edition.), p. 7. 以下、本稿における作品からの引用はすべてこの版からのものとし、本文で()内にページ数のみを記すこととする。なお、この「真実」とは、語り手が、「グロテスクな者の書」(“The Book of the Grotesque”)で言っている、老人が挙げている真実のこと。一人の人間がひとつ、もしくは幾つも手に取り、その人間たちをグロテスクにするもの。老人の考えでは、「それらの人々がそれらの真実のうちのひとつを自分のために手にして、それを自分の真実と呼び、それに従って生きようとするやいなや、その人間はグロテスクになり、その人間が抱いた真実は誤りまたは偽りとなる」(7)という。
2. 森岡裕一、『楽しく読めるアメリカ文学』(高田賢一、野田研一、笹田直人編集)、ミネルヴァ書房、1995。(p. 74)
3. 岩崎 健、『アメリカ小説に見るアメリカの夢』、近代文藝社、1995。(pp. 66-67)
4. 『ジーニアス英和大辞典』、小西友七、南出康世編集主幹、大修館書店、2001。
5. 前掲書に同じ。
6. 『イメージ・シンボル事典』、アト・ド・フリース著、山下主一郎監修、荒このみ他共訳、大修館書店、1991。
7. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
8. 『イメージ・シンボル事典』、既出。
9. 前掲書に同じ。ただし、right and leftの項目。
10. 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
11. 別府恵子、渡辺和子編著、『新版アメリカ文学史』、ミネルヴァ書房、2005。(p. 135)
12. 森本あんり、『アメリカ・キリスト教史』、新教出版社、2007。
13. 日高義樹、『アメリカ内乱白人の理論』、光文社、1992。(pp. 88-89) 日高は、南部でのKKKの残虐さを紹介するために、次のような話を引用している。「黒人が自由になると同時にKKKがやって来た。黒人が畑仕事に精を出し、うまくいき始めるとKKKがやってきて、畑をめっちゃめっちゃにした。政府が学校を作るとKKKが来て壊し、留置場にやってきて黒人を連れ出しては絞首刑にしたり、首を切って川に放り込んだりした。ジム・フリーマンという働き者の黒人がいて、

せっせとお金をかせいで小屋を建てたが、KKKがやってきて、小屋の前でフリーマンの首を吊り、小屋を焼いてしまった……。KKKは白いシートで顔を隠してやってきたが、隠れてよく見ると、友達だと思っていた白人が大勢いた。昼間は愛想よくものを売ってくれていた白人が、夜になるとKKKになってやってくる。……」(pp. 98-99)

14. 森本あんり、既出。(p. 135)

15. クー・クラックス・克蘭の黒人への暴力行為のすさまじさについては、特に南部の惨状についてだが、『物語アメリカの歴史』(猿谷 要、中公新書、1991、(pp. 116-119))に詳述されている。そのなかに、シカゴについて特に言及したわけではないが、次のような一節がある。「信じ難いことだが、黒人に対するリンチがあらかじめ予告され、女性や子供までが見て楽しむために集まり、木に吊された奇妙な果実の死体から、心臓や肝臓の薄切りをみやげに持ち帰ったという。」(p. 118)

16. 『新英和大辞典』第6版、竹林滋編集代表、研究社、2002。

A Reading of *Wineburg, Ohio* (4) : On “The Philosopher”

SHIMBORI, Takashi

This paper is a part of my serialized essay, “A Reading of *Winesburg, Ohio*,” the aim of which is to define what truth is to each main character of respective stories in the book. The narrator of “The Book of the Grotesque” states that each character “as he appeared snatched up one of the truths and some who were quite strong snatched up a dozen of them. It was the truths that made the people grotesques It was his [the old man’s] notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood.” Discussing “The Philosopher,” this installment is an attempt to define what “truth” is to Doctor Parcival.

When Parcival was a boy, he felt inferior to his elder brother because he was not loved as much as his brother was by their mother. His elder brother supported his mother and younger brother to some extent, bought some things for them, and therefore, as Parcival believed, was loved more by their mother than he was. He was considered to be Parcival’s “superior,” but was unfortunately run over by the train car belonging to the railroad company for which he worked and in which he and his colleagues lived.

His brother’s death made Parcival rather skeptical about the meanings of human existence and deeds. Probably, in Chicago, Parcival saw human ugliness, roughness, and cruelty. That must have deepened his skepticism. In addition, supposedly, in that corrupt city, he was not able to perform his duties as a minister, and that made him skeptical about faith. When Parcival came to Winesburg, he seemed to have been in a state of despair about everything. At this stage, his truths seem to be the skeptical ideas that follow. First, one should not expect anything of others, because if one expects something of others, they fail to come up to his expectation. Second, despising everyone is a way to avoid experiencing the pain of being made disappointed. Third, punishment by others is unreasonably inflicted all of a sudden. Fourth, in order to evade punishment, one should keep his relationships with others insubstantial, and be always careful of his words and deeds.

On the basis of these ideas, Parcival says, "Everyone in this world is Christ and they are all crucified," which is the essence of his philosophy. Readers cannot know how much of the philosophy George Willard thinks is true. But they are likely to become a little doubtful about Parcival's ideas as the story reads, "The cruelty of his [Parcival's] refusal had passed unnoticed. Indeed, the man who had come up the stairway to summon him had hurried away without hearing the refusal. All of this, Doctor Parcival did not know" That is because Parcival's philosophy is constructed from only a few distorted aspects of humanity and therefore is flawed. This does not mean, however, that the narrator censures Parcival, because his aim is to depict Parcival as a warped philosophical character.